

関西実験動物研究会、その貢献と期待される役割、一大学関係者の経験から

塩見 雅志

神戸大学医学研究科附属動物実験施設

1985年3月15日に今にも崩れ落ちそうな楽友会館の2階で、「WHHL rabbitの繁殖能力に及ぼす近交退化ならびに高脂血症の影響」を発表した。これが、本研究会との出会いである。おそらく3月に会員発表会があったのは、この一回（第5回研究会）だけではないだろうか。その後すっかり疎遠となり、当施設の助教授に就任した2年後の1992年に故山田淳三先生からお声を掛けていただき、本格的に本研究会にお世話になることになった。当施設ではWHHLウサギを開発・維持しながらリポタンパク代謝や動脈硬化の研究を実施しており、実験動物学の主流であるマウスやラット、微生物コントロールや近交系には疎遠であった。しかし、施設の運営ではそんなわけにはいかない。幸いにも本研究会では年4回の多岐にわたる講演会、しかもさまざまな疾患モデル動物の特性のみならず、動物福祉、動物実験に関する国際的な動向、革新的な技術開発、関連民間企業からの情報提供など、実験動物学の勉強にはもってこいの環境であった。助教授就任後には様々なハードルがセットされていた。1992年、自治体から提供されていた抑留犬の医学研究への払い下げが全国的に取り上げられ、神戸大学もターゲットとなった。本研究会の会員であった施設の専任教官のご指導と激励によってこの難題をクリアーし、国内で唯一自治体からの譲渡が継続された。この経験は動物実験における動物福祉について体系立てて考える機会となった。1995年には阪神淡路大震災に被災し、多大な被害を被った。その際にも滋賀医科大学の鳥居先生、京都大学の芹川先生、大阪大学の黒澤先生、その他多くの方々に支援していただき、そのご助力でなんとか復旧することができた。復旧後の施設の再建では、本研究会で得た知識を活用して耐震性と動物福祉に配慮した大型の飼育設備を開発した。この経験によって、災害対策・復旧対策プランを事前に作成しておくことの重要性を学んだ。さらに、2009年の施設の移転においても本研究会から得た知識を活用させていただいた。医学研究における動物実験の基本は、動物実験の結果をヒトに外挿できることであり、そのためにはヒトの病態に対応した動物種／疾患モデル動物を開発し、研究に使用することが重要である。生物学的な探究とともに、トランスレーショナル・リサーチは実験動物学が今後目指すべき方向の一つである。本研究会では、実験動物/動物実験についてさまざまな角度からの情報を入手でき、会員にとって極めて有用な情報源である。

今後とも、本研究会が関西の実験動物関係者の共同体として発展し続けることを期待している。